2020
秀作

第18回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

これからの日本において

大分県・大分東明高等学校　２年　鳥井　ゆりあ

2020年の１月、２月ごろから急速に流行りはじめた新型コロナウイルス。その新型コロナウイルスの対応で10万円の特別定額給付金が多くの家庭を支援するために支給されました。手にした10万円の使い道に迷った人は多いと思います。将来どうなるかわからず心配だから貯金したり、困窮しているから日々の生活費にお金をまわす人、緊急事態宣言が解除されたら、不要不急なものに使おうとする人もいます。

私は給付金が配布されるとテレビで報道されてからずっと、給付金の使い道に悩んでいました。友達に「給付金何に使う？」と聞くと、「とりあえず買いたかったものを買う。」と返されました。確かにそれが一番よいのかなと思いました。ですが、母の職場の人は「娘には３万円しかあげなかった。」と話していたと母が言っていました。ＳＮＳなどを見ると、全額貯金ということにされたと言う人もいました。さらに迷いました。親に管理させて、貯金にまわすというのもいいと思ったからです。

ある日、給付金を申請する紙が家に届いていました。母親がペンを持つ手を止めていたので、何をそんなに悩んでいるのか、と尋ねると祖母の給付金を「どうしようか迷っている。」との答えが返ってきました。祖母は老人ホームにいるので、母が書類を書くことになったのでしょう。そう推測してから、「どうするも何も給付金をもらうしか選択肢がないんじゃないの。おばあちゃんの分も使えばいいと思う。」そんな風に返した覚えがあります。それに対して母は、「給付金を全額寄付することもできるんだよ。」と予想外の返答をしたのでした。

私は本当にどうしようか迷いました。買いたいものがないわけではありません。親にもお金を預かるという案があったものの、最終的には「給付金の使い道は子どもに全てまかせよう。」そう決めたのか、全部自由に使っていいよと言われました。だから自分のために使おうと思っていたのです。母が寄付しようとし

© 金融広報中央委員会2020

ているお金は、祖母の老人ホームのために使われると、あの後言われました。新型コロナウイルスで老人ホームの経営が厳しい状況であるという情報もテレビで流れたようでした。コロナがなければ、存在すらしなかった特別給付金。それが私の手元からだけ存在しなくなると考えれば悔いはないのだと、そう思うようになりました。

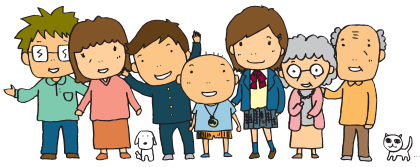
私は母に言いました。給付金を寄付して欲しいと。母は驚いた表情をしましたが、うなずいて、「じゃあおばあちゃんの分と一緒に送っておくね。」と返しました。私はこれでよかったのだと、そう思えました。

現在、新型コロナウイルスの影響で日本のみならず、世界全体が深刻な経済不安に直面しています。一時期感染者は減少傾向にありましたが、再び増えはじめています。自粛をするべきだという風潮が広まり、外出しないようにする人がいる中でお金をどう使うべきか迷っている人もいると思います。私は、節約をし、無駄遣いをせず、貯金をすることへの意識を大切にしながらお金を使った方がよいと思います。経済を回すということも大事だと思いますが、コロナ終息への見通しが立っておらず、ワクチンも開発されてはいません。収入が減少しているので、自粛が長引く可能性もふまえ、お金をためておいた方がよいと思っています。また、収入が減少していない人は、自分達以上に困難な状況で暮らしている人のために私のように給付金を寄付してみるのもよいかもしれません。老人ホームなどの身近な場所に寄付したり、ＮＧＯなど世界の地域に対して支給をする団体に寄付をしたり、そういったこともできます。また、日本の医療施設では、コロナ感染予防対策に必要な資材を購入するほどの余裕がなかったりしています。また、コロナ対策に携わっている医療従事者は身体的・精神的に負担が大きく、風評被害などで経営危機に陥っている医院もあります。親が失業してしまった子どもたちに食事を支援したりしている団体もあります。重症で苦しんでいる老人の方もいます。そんな人達のために微々たるお金であっても自分にとって皆にとって有意義な使い方をした方がよいと私は思っています。

現在、世界ではとてもたくさんの人達がコロナに感染しています。いつコロナ禍が沈静化するのか、いつワクチンが開発されるのか、いつまで自粛すればいいのか。不安はたくさんあると思います。ですが、不安だけを抱えてはいけないと思います。自分が今、何をできるかを考え、把握し、今後に備え、自分

© 金融広報中央委員会2020

だけではなく、他の人々と助け合っていくことが重要だと思っています。そしてこの状況を乗り越え、これからの日本を支えていきたいと思います。



© 金融広報中央委員会2020